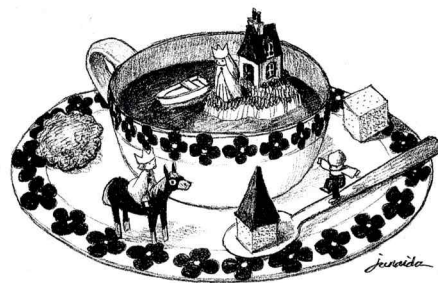


# 朝日 俳壇



〈日曜日のブローチ 24〉 junaida

## 俳句時評 澤好摩の心象

岸本 尚毅

音のみの波また波の去年今年 澤好摩  
近刊の『澤好摩俳句集成』（ふらんす堂）所収の句集未収録句。「去年今年」は年が改まること。「音のみの波」は夜か。誰も見ることもない暗い海面の「波また波」。厳肅な新年の情景を、暗澹と、しかも平易な言葉で描いたこの句は二〇二三年の発表。澤は翌二三年、旅先での転倒のため七十九歳で急逝した。前衛的な作風で知られる高柳重信の高弟と目される澤の句は、しばしば伝統的な作品と見紛うようでありながら、「自らの俳句の言葉をとこまでも自らのものにしよう」としての、入念な彫琢（ひょうく）「高山れおな」が施されている。  
春の暮赤し橋残りたる 好摩  
夕焼けかもしれないが、赤く塗り潰したような「春の暮」を背景に、朽腐した橋桁が残っている。このうら悲しい景もまた、澤の心象だったのかもしれない。その澤から「貴君は志賀康を詠むとい」と言われたことがある。自分より若い伝統的な作風の私に、心象性の高い句を薦めたのは、澤の見識だったのだ。時明りまず一骨を動かさん 志賀康  
近刊の『志賀康俳句集成』（文学の森）所収の未刊句集より。「時明り」には辞書的な意味があるが、それよりも「星影を時影として生きてをり 高屋窓秋」を連想した。「時」を「時影」「時明り」すなわち光として意識しながら刻一刻と生き続ける存在。何もかもそぎ落とした「生きてをり」と比べ、「一骨を動かさん」には自身の肉体の感触が残っている。窓秋、康の句はいずれも無季。季節を超越した句境だ。（俳人）

第71回角川俳句賞 角川文化振興財団主催。埼玉県の大野千佳さん(41)の「愛嬌」(50句)に決まった。  
鈴木牛後句集「鄙の色」 2019年から23年までの372句を収めた第4句集。総ルビを採用した。「ひだるさや藪草は鄙の色」「黒牛に黒い反芻熱波来る」「いとど出てくる住み古りし貌をして」(書肆アルス・2200円)

## 風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

## 川野里子選

裂けそうに膨らんでいる猛暑日の工事現場の空調服が (観音寺市) 篠原 俊則  
豚肉を食べない友と豚肉を食べる私の静かな夕餉 (東京都) 粟生 翠  
日本刀を枕元に置き寝ていた父今なら解る戦争の所為と (飯能市) 高橋 節子  
ぬいぐるみを見つめる彼の眼差しに胸を撫まれUFOキャッチャー(相模原市) 榎本 ハナ  
AIは「愛」とも読める歌つくらせ呼び起したい「精製愛」を (富谷市) 川村 空也  
ああ言えば良かったのかと立ち止まるテッポウユリがこつちを見てる (周南市) 香川 文  
家計の赤字埋めむとして殺気立つ開店セールは一揆のごとし (羽村市) 川元 源一  
☆パリコレのランウェイのごとく新米をカートに乗せて歩く店内 (十日町市) 小川 サト  
神様がぐい呑みしたような減り方で暑さに消えゆく神棚の水 (京都市) 後藤 正樹  
満星のアーチの先にある月を綺麗と仰ぐ余裕の監督 (神戸市) 今井 修

【評】一首目、激しい暑さと戦う空調服の膨らみだ。二首目、「豚肉」は食物なのか命なのか。繰り返しが生々しい。三首目、戦争の傷の深さをあらためて思う。五首目、「精製愛」は「生成AI」か。人間には難しい純愛をAIに求めている。

## 佐佐木幸綱選

閉じられた雨戸に朝も夜もなく過ぎし日を置き友は施設へ (本庄市) 田中 礼子  
青待てず渡り始めた子らをまだ叱れる人のいる城下町 (横浜市) 島巡 陽一  
面会日ごこのなと問う妻のその背を撫でて言葉に詰まる (江別市) 増田 辰良  
あの山はもうまつたけの出てるはず熊と仲よくできないものか (弘前市) 永井 一喜  
やはらかなパイプの煙を包帯の耳がくゆらすゴッホ自画像 (焼津市) 増田謙一郎  
寝ころんで四人で見た天の川を酔った夫は覚えていない (横浜市) 西尾 綾子  
☆パリコレのランウェイのごとく新米をカートに乗せて歩く店内 (十日町市) 小川 サト  
「贅沢は敵だ」を素敵だと読み換へし戦中の民の反骨おもしろ (東京都) 上田 国博  
ランナーの首、肩、腕に水をかけ残り十キロ笑顔で送る (札幌市) 佐久間優子  
義母さんのこの世で最後のうな重を前力ゴに入れペダル立ち漕ぐ (浜松市) 久野 茂樹

【評】第一首、一人住まいの家を出て介護施設に入った友人。去りゆく家を描写した上句の表現、的確。第二首、「まだ」がふくむ意味の大きさに注目。第三首、切ない思いを表現する一首。認知症が進行してしまったのだ。

## 高野公彦選

軍事パレードで国威発揚する国に住む人々は幸せなりや (船橋市) 佐々木美彌子  
キャンプ場、遊歩道まで閉鎖され日ごと増えゆく熊の橋頭堡 (五所川原市) 戸沢大二郎  
今日はまだ八月三十二日らし暦移れど猛暑居座る (東京都) 北條 忠政  
この国の四季のやさしさ崩れゆくひとこともれよミズヒキの紅 (福島市) 美原 凍子  
近隣の無事願いつつ訃報待つ団地自治会香典担当 (茨城県) 原 里江  
新米も秋刀魚もいらない引き換えに戦争とめてくれませんか (横浜市) 菅谷 彩香  
「LINEとかメールやつぱり苦手なの」文子に香りを忍ばす返事 (筑後市) 近藤 史紀  
谷あいのスターマインは大音響 天傷つかぬかと案ずる程に (飯田市) 草田 礼子  
富士登山ツアーに参加できた子よ不登校でもなるようになる (宇都宮市) 馬淵のり子  
その先は考えたくない箱根の中で暴れるアライグマのこと (横浜市) 臼井 慶子

【評】1 一首目、威風堂々の軍事パレードだが、一般国民は幸福か、との疑問。2 一首目、人間の生活範囲にじわじわと熊が侵入してくることへの恐怖。3 一首目、九月一日なのに猛暑であることを、まだ八月三十二日か、と言ったユーモアが楽しい。

## 永田和宏選

朝がきてしほみかけてく月見草 子に叱られて見る月見草 (新潟市) 太田千鶴子  
会へないのと会つても覚えてゐないのといづれか切なき花いちもんめ (仙台市) 二瓶 真  
ケガをしてサッカー休んでもどつたら「おかせりキャプテン」うれしかったよ (福井市) 丹羽 悠人  
「かあさんはあとで食べる」と子らだけに飯与えた戦後の母は (金沢市) 竹内 一二  
ぼろぼろの蝶がアザミに集まれる早池峰山頂あしたは九月 (盛岡市) 榎本 拓  
「兎に角」と「兎も角」は意味が違ふらし「兎角」もありて言葉は愉快 (三重県) 藤井 恵子  
上澄みと沈殿といふ二極化の不意に悲しきフランスコの中 (岐阜市) 清瀬 雅司  
生前は呼ぶことのない妻の名を返事のないまま繰り返す (東京都) 藤原あつや  
銀行に勤めて十年指先で二七札が分かるほど数えし札束 (佐世保市) 近藤 福代  
「もし明日私が消えたらどうする?」と妻が抜き打ちテストをしてくる (生駒市) 高橋 裕樹

【評】太田さん、月見草のリフレインが効果的。寂しいが、叱ってくれる子の居ることの幸せも。二瓶さん、どちらも切ない。結句の意外性が巧い。丹羽君は、小学六年生。待たれていたキャプテンの復帰。十首目、うーん、私なら多分、赤点。